

井戸ばた会議

3月号の★募集テーマから

平成をふり返って

介護保険のスタートと同時に現場に入った人だけでなく、措置制度の時代から変遷を見てきた方など、貴重なお話をいただきました。ケアマネジメントも権利擁護も、現場の地道な努力の積み重ねで形になったのだと分かりました。ボクがおじいさんになった頃は、みなさんがビシビシ育てた人が支援するのですね。自立支援が今より厳しかったりして！？ (編集部)

手探りで学んだ 介護保険の黎明期

秋田県 石橋裕子さん 47歳

平成が始まったのは高校生の時。卒業後は老健で働き、2000年にケアマネジャーになりました。当時は、制度やケアマネジメントについて解説した本も、インターネット上の情

報も今ほど多くはなく、すべてが手探りででした。地域のケアマネで勉強会を立ち上げ、月に数回集まっては、ケアマネジャーに求められていることは何だろう、自立支援のケアプランって？などと日々話し合い、研修でもらった資料を持ち寄って学んでいました。楽しかったのは、アセス

メントツールの研究です。さまざまな様式を取り寄せて、どれが使いやすいかみんなで検討しました。担当する利用者の数も運営基準で決まっておらず、1人で100人ほど担当している人もいて、勉強と実践は同時進行。学ぶための情報と機会にあふれた今とは、隔世の感があります。

投稿用紙 (p.43) もしくは、メール投稿 (caremane@kankyo-news.co.jp) で掲載された方には、**1,000円の図書カード**を差し上げます。

家庭に仕事に 駆け抜けた

東京都 M・Y 52歳

平成になってからの31年間、私の家族とともにさまざまな困難を乗り越えながら、介護の仕事、ケアマネの仕事ががんばってきました。

介護の仕事をしようと思ったのは、結婚して専業主婦をしていたころ、何かやりがいを持てることに挑戦したいと思ったことです。料理も得意だし、おむつの交換は子どもので慣れていたもので、できるかとも思い、通信講座でヘルパー2級を取って訪問介護事業所で働き始めました。本人が、本当にしてほしいことは何かを探り出しながらケアをするのが楽しく、対人援助の技術を極めてみたいと思っていたサ責時代に、縁あって地域で活躍するケアマネさんから勧められて、2008年にケアマネになりました。それからは、3人の子ども（全員男の子）の子育てと仕事で、一層忙しい日々でした。

一番大変だったのは、夫ががんになったこと。当時所属していた居宅の管理者にプランを作ってもらい、私も医療知識を勉強しながらかわり、数年前に看取りました。昨年から居宅の管理者になり、今年、念願の主任ケアマネも取得しました。新しい時代は、例えば地域の家族介護者が集えるサロンの運営など、ケアマネジメントを駆使して地域に貢献したい。

認知症の人のケア 追求する日々

愛知県 鬼頭恵津子さん 60歳

今年で還暦を迎えます。30代で親の介護に直面し、支えるための知識を身につけたくて、2000年からデイサービスのスタッフとして働き始めました。

当時の現場は、まだ措置の時代の面影が残っていたと思います。例えばデイでは、男女の入浴が混浴

でした。認知症があっても本人は分かりますから、女性の拒否がすごかったのを覚えています。その後転職した特養でも、認知症のある人のおむつ交換を、本人を廊下に立たせて行っていた。フロアリーダーに、近所の公園まで散歩がしたいという入所者にリハビリをしてはと提案しても「危ないから必要ない」と、理由も聞かずに断られることもありました。

そうした、本人の尊厳がないがしろにされた認知症ケアを見て、自分の親がこんなふうにならたらたまらない、ケアの知識を身につけ、何とかして現状を変えたいと入職したのが、現在のグループホームです。自分の親を介護した経験がある人も多く、本人中心、尊厳を守るためのケアの研究・実践に積極的に取り組んでいました。声かけなどのかかわり方次第で、重度の人でもいい方向へ変わっていくことが分かり、やりがいを感じて毎日勉強しました。今は管理者になり、市の認知症介護の指導者としても活動しています。